

校長会 みえ No. 63

●発行 三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内
TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com
●編集 三重県小中学校長会 広報委員会
●印刷 光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



私の学校づくり

地域とともにある 学校



名張市立北中学校 校長 山崎 博史

名張市立北中学校は名張市の北部に位置し、本年度で創立43年目を迎えます。以前は生徒数1300名を超える県下有数のマンモス校でしたが、市の校区再編により、現在は全校生徒数301名の小・中規模校です。生徒数減、職員数減が続く中で、学校内外の人的・物的資源を生徒の学びや育ちのためにいかに有効に活用していくかが課題です。

名張市では、市の施策として、令和2年度より全小中学校に学校運営協議会を設置し、学校と地域が協働し、目指す子ども像の実現に向けて、ともに子どもを育てていく取組を進めています。本校では、学校長を含め12名の学校運営委員が3つの部会（学校運営部会・学校支援部会・地域連携部会）のいずれかに所属し、年間3回の学校運営協議会及び部会長会を中心に熟議を重ね活動を進めています。

学校支援部会では、環境整備支援、学習支援、部活動支援の3つを柱として支援を進めています。本年度は、夏季休業中の中庭の整備及びベンチの設置、生徒の夏季学習サポート会、家庭科のミシンの授業のサポート、朝の短学時の絵本の読み聞かせなどを中心に取組を行ってきました。地域連携部会では、各地域のまちづくり委員会との連携を図り、ウインドアンサンブル部の秋祭りでの演奏披露や美術部の作品展示など、生徒の活動する様子を地域の方に参観いただきました。11月の市の総合防災訓練の折には、生徒が地域の方とともに避難所開設訓練に参加し、将来災害時に地域の担い手となるような力を育むための取組を行っています。

本校の目指す子ども像「夢をもち、心豊かに、たくましい生徒の育成～感謝・感動・つながり～」に迫るために、今後も学校と地域がともに知恵を出し合いながら、生徒を中心に据えた取組をさらに充実させていきたいと思っています。

今日的課題の 克服に向けて

子ども自身が考え、 動き出す学校づくり

鳥羽市立加茂小学校 校長
樁 美幸



「校長先生、彼岸花が咲いたよ」「鯉がおいかけっこして」1年生の子どもたちが運動場のフェンスにしがみつきのながら口々に様々なことを伝えてくれます。子どもたちは非常に素直で、素敵な挨拶をかわすことができ、教えたことを忠実に守りやろうとします。しかし、10数年前、教員時代に現任校で出会った当時の子どもたちに比べると、「覇気がない」「指示されたことはできるが自分からやろうとしない」姿が気になりました。

昨年度このような実態を基に、まずは「子どもたちの“意欲”を支える教職員を育成したい」と考えました。そのため、教職員自身が、「子どもの話に耳を傾ける」「具体的なかわり方を学ぶ」「見守り、待つ」「成長を見届ける」姿勢を徹底することにしました。そして、自分の生き方を拓く学びにするために、生活科・総合的な学習の時間を通じた体験的な学習こそ「自ら考え、人とかわろうとする力が生み出される」と考え、「加茂小でしか学べない」ことを教職員自身が意欲をもってカリキュラム編成していくよう進めてきました。

また、学級会・代表委員会・児童会を通じて「自分たちのことは自分で決める」自治活動を推し進めてきました。昨年度は廊下歩行について、6年生が協力してテープを貼り、他の学年に右側通行やゆっくり歩くことを提案する活動に取り組みました。また、今年度は、ランドセルの重さについて具体的にどうすれば無理なく持ち運びできるか、他の学年に聞き取ろうとする姿がありました。

高学年が校長室に足を運び、具体的な事柄を交渉し実践してみる。自分たちの力で成し遂げたことを、加茂小のきまりとする。身をもって学んだ達成感は、必ず次の場所で生かされることと思います。様々な事柄にも意識的に目を向け、意欲をもって解決していく力こそ、これからの時代に必要なものだと思信しています。2年後に校区の中学校が再編されることになり、2つの中学校から進学校を選択することになる5、6年生が、「自分らしく」「自信をもっ

て」過ごせる場所を自ら選択できる、より良きかわりを職員とともにしていきたいと思います。

不登校児童生徒に 対する居場所づくりと 学びの保障

いなべ市立藤原中学校 校長
伊藤 彰浩



文部科学省によれば、令和4年度の全国小中学校の不登校児童生徒数が過去最多の30万人近くになっているとのことであった。本校においても、不登校の生徒は各学年に在籍しており、居場所づくりと学びの保障が喫緊の課題となっている。

教室に入りづらい生徒へは、登校時間をずらして登校、保健室登校、別室においてオンライン学習、教育支援センターの利用等、当該生徒の状況に応じた居場所を選択しつつ、指導と支援を進めてきている。

特に、本市中学校においては、令和4年度から2名の市費支援員を配置した校内教育支援センターを開設している。支援員は関係教職員や関係機関と連携を図りながら個に応じた生徒指導、学習支援を実施し、不適応、不登校の状態にある生徒に寄り添った居場所づくりを実施している。引き続き改善・充実が求められるが、この校内教育支援センターの活用は非常に有効であると感じる。今後は、全県下のすべての学校においても、同様な条件整備が実施されることを願いたい。

安心できる居場所確保後には、次のステップとして個に応じた学習指導が求められる場合が多い。生徒の状況によって学習内容は異なるが、個別の指導計画を立てた上で、教科担当者が個々の実態に応じた指導を行い、評価を行うことが理想である。しかし、現状では教科担当者が十分な指導と評価の場を確保することは困難である。支援員と教科担当者との連携により、最善の学習環境を準備することが期待される。

また、結果として、該当学年における教育課程の一部しか学習できなかった児童生徒へは、どのような学習評価が適切であるのか慎重な検討が必要である。文部科学省通知「不登校児童生徒への支援の在り方について」によれば、「当該学習の評価を適切に行い指導要録に記入したり、評価の結果を通知表その他の方法により児童生徒や保護者に伝えたりすることは、児童生徒の学習意欲に応え、自立を支援する上で意義が大きい。」と示している。引き続き、不登校児童生徒が、自らの進路を主体的にとらえて、社会的自立につなげられるよう指導とその評価について考えていかなければならない。

研究大会報告

◆全連小東京大会報告◆



持続可能な取組を めざして

津市立大三小学校 校長
本多 雅子



4年ぶりに参集型で開催され、今年度は全体会、分科会に加え、全国連合小学校長会 75 周年記念式典もあり、大きな節目の研究協議会となりました。

第6分科会「健やかな体」では、岐阜県本巣市立弾正小学校より、児童の運動能力の実態や運動に関する意識を明らかにし、効果的な運動量確保の方途や運動能力向上につながる運動、市内で共有できるカリキュラム・マネジメントのあり方について市内全体の取組が発表されました。また、教科専門指導員の配置により担任教師の負担感や準備時間を削減し、働き方改革につなげた実践も発表されました。

千葉県長生村立八積小学校からは、主体的・積極的に健康で安全な生活を実践することができる資質能力を培うために既存の組織の活動等を活かし、運動に親しむ環境、体力向上と体育の授業の充実等、新たな視点から今までの教育活動を見直し、持続可能な取組となるようカリキュラム・マネジメントを進めた実践が発表されました。校長として、複雑・多様に見える学校業務を整理・明確化し、方向性を示すこと、そして教育目標達成のために横断的視点で内外のリソースをつないで活用することが重要であると改めて感じました。

シンポジウムでは、教師のウェルビーイングについてパネルディスカッションが行われました。教師一人一人が教職の魅力を感じながら、モチベーションを上げ、やりがいを持って持続可能な取組を実践できるよう、「人が育つ場づくり」をめざして取り組んでいきたいと感じた2日間でした。

◆全日中大分大会報告◆



とよ 豊の国 大分で…

志摩市立浜島中学校 校長
山本 太

校長として最後の年になる今年、「全日中大分大会」への参加の機会をいただきました。

大会1日目(10/26)は、お昼過ぎまで全体会。4年ぶりに参集形式での開催となり、喜びと熱意に満ちたスタートとなりました。

昼食後は分科会。第5分科会「社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実」(提案①茨城・②山梨)に参加。①日立市立日高中学校より、キャリア教育を校長のグランドデザインの重点課題の中に位置付けた取組についての報告がありました。キャリア発達を促す主な取組が、キャリア形成と進路指導との関連や系統性が分かる図でまとめられていました。②市川三郷町立三珠中学校より、「ふるさと教育」と「キャリア教育」を融合させた『みさと学』としての取組の報告がありました。これは、従来行っていた学習活動を、地域資源、教材、地域連携という視点から再編成した取組でした。

小グループでの意見交換では、印象的な職場体験の取組の紹介がありました。その学校では、職場体験を学校主導で行うのではなく、「地域学校協働本部」を活用し、地域の職場の方々積極的に子どもたちに関わってもらい、指導もしてもらっているとのことでした。このことが、「地域ぐるみで子どもたちを育てる」という視点をより強固に持ってもらうことにつながっているそうです。

以上、1日目のみの報告となりますが、全国の校長先生方の熱い心を感じ、刺激をいただいた2日間でした。



◆東陸連小岐阜大会報告◆



ぶれない リーダーシップ

御浜町立御浜小学校 校長

矢賀 睦都恵

第10分科会「社会形成能力と連携・協働」に参加しました。視点1「社会の発展に貢献する資質・能力を育む教育活動の推進」では、児童の自己有用感を高めるために、子どもをやる気にさせ、子どもの意見から組織的实践に引き上げ、地域のために役立っているという成就感をもたせる仕組みづくりについて討議しました。視点2「家庭や地域等と連携・協働を深め、創意ある教育活動を展開する学校づくりの推進」では、地域の「ひと・もの・こと」を体験しながら教科横断的に学ぶことで、教育的機能を十分果たし、将来の積極的社会参画へつながる取組について討議しました。

PTAや地域との連携は、学校にとって必要ですが、空洞化や形骸化との戦いで、教職員の負担増になるという実態は参加者みんなが抱えている悩みでもあります。それを克服していくためには、校長が本質を見極め、教職員に問いかけながら、ぶれないリーダーシップをとることがいかに大切であるかを再確認し、身が引き締まる思いでした。子どもは家庭で育てられ、学校で学び、地域に生きる存在であることを保護者や地域としっかり共有し、連携のカリキュラムを検討していく必要を痛感しました。

全体会では、「子どもの生きる力の育成、学校安全、教職員の資質向上、社会に開かれた学校づくりなど、学校に課せられた使命は多くありますが、私たちは校長として、未来を築く子どもたちを育成しているという自信と信念を持ちましょう」という言葉に勇気づけられました。



◆東陸中石川大会報告◆



東海北陸中学校長会 研究協議会 石川大会に参加して

桑名市立長島中学校 校長

寺島 康志



東海北陸中学校長会研究協議会石川大会に、参加させていただきました。

1日目は、各分科会が開催され、私の参加した第4分科会では、浜松市と桑名市の実践発表が行われました。浜松市立西部中学校からは、ICTの有効活用を通して、家庭とつながる健康教育の発表でした。桑名市立明正中学校からは、喫緊の課題である「部活動の地域移行による子どもたちの活動組織の模索」と題し、校長先生ご自身がバレーボールアカデミーを立ち上げ、競技人口の普及、技術力向上と指導者育成を同時に行っているという実践発表でした。本年度も参集型協議会で行われ、各県の校長先生方の特色ある学校経営に熱きものを感じ、学びの多い分科会でした。

2日目の記念講演では、石川県和倉温泉加賀屋の小田禎彦氏から、「地域の活性化と観光産業」と題しての講演がありました。おもてなしの文化は、観光客を歓迎し、地域の魅力を引き立てるために重要な文化であります。観光客に対して質の高いサービスを提供し、おもてなしの文化を具現化していること、観光客が快適で満足度の高い体験を得ることは、リピーターを引き寄せる要因であるなどのお話がありました。コロナ禍で大きな影響を受けた観光業。その苦しさの中でも決してゆるがなかったおもてなしの精神。日本文化のしなやかさや強さを感じさせていただいた講演でした。

三重大会報告

小学校長教育研究大会



久しぶりに会した 教育研究大会に 参加して

亀山市立井田川小学校 校長
清水 英輝

令和5年度の小学校長教育研究大会が、7月27日に県総合文化会館で行われ、久しぶりに県下の校長先生方が一堂に会する大会になりました。

開会式に続いての記念講演では、JAXAの山中浩二様から、「宇宙開発という挑戦」と題して講演いただきました。多くの楽しいエピソードを交えた講演に、時間を忘れて聴き入りました。その中でも、特に印象に残ったのは、フライトディレクターとして大事にしてきたこととして、「一人ひとりを信じて任せることです」と明言されたことです。学校管理職としてどのようにあるべきかをご示唆いただいたようで、今までの自分を振り返り反省しきりでありました。

午後の分科会では、各分科会で活発な議論がなされたと思います。私が参加した第6分科会では、発表者からは学校の取組を紹介されましたが、その中で、校長としての役割について重点を置いた提案がありました。また、各グループにおいて、テーマに沿った情報交換が活発に行われ、その中で、参加者の真剣な中にも笑顔で交流する様子が見られました。

対面での教育研究大会は4年ぶりだと記憶しています。今大会は、内容の充実とともに、顔を見て、話し合うことの良さを再確認した大会でもありました。



中学校長研究大会



第60回三重県 中学校長研究大会に 参加して

紀北町立三船中学校 校長
矢賀 正之



第1分科会「カリキュラム・マネジメント」の推進～3つの側面に立ちかえて～という研究題は生涯忘れられないものとなりました。なぜなら、その研究題は私が考えたものだからです。私はこの分科会にレポート提案者として参加しました。本番の3年程前に私がレポート提案を引き受けた際、あと3年あると考えながらも研究題だけは決めておこうと思い、本番の3年前に決めた題名です。

当日の提案は東紀州地区の自然の豊かさ等を紹介し、紀北中学校長会の特色、そして、本題である3つの側面に立ち返った取組へと続けました。提案の1番のポイントは、一気に絵に描いた餅を求めるのではなく、職員室での同僚との会話や生徒との会話、学年部での指導方法の共有等、「小さなカリキュラム・マネジメント」を継続していくことが重要であるということです。この「小さなカリマネ」については研究協議でも普段から地道に積み上げていくことによって、それが教科・学年・全体へとつながり、やがて学校全体の改革・改善につながっていくことを確認し合うことができました。また、私たちが普段から実践しているあらゆる取組は、カリキュラム・マネジメントの推進そのものであることが確認できたことが大変有意義でありました。

◆本部役員だより◆



縦糸と横糸を紡ぎ、 前進する校長会を めざして

三重県小中学校長会 小学校部会長

小林 宏行

令和2年1月に国内で初めて確認された新型コロナウイルスは、令和5年5月から感染症法上の分類が5類に移行され、コロナ対策は大きな転換点を迎えました。この3年間、私たちは学校や地域の実態を踏まえ、感染対策と教育活動の継続の両立に努めてきました。この間、ICTの活用を一気に推し進めた「GIGAスクール構想」による教育環境のデジタル化が急速に進むとともに、「令和の日本型学校教育」の実現のため、新たな教師の学びの姿の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成が急務となっています。

一方、少子化の進行や、先行き不透明で予測困難な時代の到来など、学校を取り巻く環境が大きく変化し、教師の長時間勤務や不登校、いじめの増加をはじめ、教師を取り巻く環境は憂慮すべき状態です。このような中、全ての子どもたちの可能性を最大限に引き出す直接の担い手である教職員が、安心して本務に集中できる環境作りが今こそ求められています。

にこやかに「いつもありがとうございます。」と感謝の気持ちを常に大切に山下会長のもと、県内各地より集う個性豊かな12人の本部役員。合言葉は「声を届ける。」です。これまで教育環境委員会を中心として、喫緊の教育課題や地域特有の課題等を県議会議員や県教育委員会へ要望書として、私たちの声を届けました。また、本部役員と県教育委員会教育長との懇談の場において、教員不足や女性管理職の割合が低い現状から、誰もが働きやすい職場なのかを検証することや、教員の満足度を上げ、明日への意欲につなげることが、子どもたちの様々な能力向上につながる等について、意見交換をしました。

さらに、県内のすばらしい実践に触れ、活発な意見交換をとおして、自らの専門性の向上を図る私たち校長の貴重な学びの場である研究大会を、小学校では4年ぶりに参加型で開催ができ、中学校では、昨年度の東海北陸地区三重大会を契機にさらに充実発展させることができました。

これまでの諸先輩方のたゆみない歩みが縦糸、この縦糸の上に今の活動や取組があり、現職校長の横のつながりが横糸、この縦糸と横糸をさらに強固にしていくことを確認し合い、この一年間の皆様のご協力に感謝申し上げます。

◆県立学校長会との懇談会◆

誰一人 取り残さない 教育をともに 進めよう



宇仁田元副会長



上田章善副会長

8月31日(木)、三重県教育文化会館にて「令和5年度三重県立学校長会と三重県小中学校長会との役員懇談会」を県立9名、小中14名の参加のもと、開催しました。

はじめに「教員確保の現状と課題」について話し合いました。教員不足は全国的にその解決が急がれる重要課題となっていますが、県内各地の県立学校・小中学校の深刻な現状を情報交換することができました。教員採用試験の前倒しや内容変更、大学と連携した将来の教員育成など、教育委員会によるさまざまな対応が行われていますが、これらと連動し学校等でも可能な取組を行っていくことの必要性を確認しました。

続いての話題は「支援の必要な児童生徒の状況と小中高の連携」についてでした。三重県でも全国的な状況と同様に、発達障がいを含む特別な支援を必要とする子どもたちが増加しており、一人ひとりの障がいの状況については重度・重複化、多様化しています。そのような中で、小中あるいは中高において途切れのない支援を充実させていくことが重要であると再確認を行いました。また、志望する高校での支援について、事前に本人、保護者への十分な説明を行い理解を得た上で、高校生活が安心してスタートできているといった事例も紹介され、早い段階での中高の引き継ぎの成果を確認できました。

最後は「部活動の地域移行に関する現状と課題」について、小中学校長会から、もともと部活動の地域移行は教職員の負担軽減、働き方改革から始まったものであり、まずは土日の地域移行を第1段階として目指していること、また、どの地域においても「受け皿」がない状況で、指導者確保やそのための財源確保等の問題があり、小中学校長会としても県議会議員・副議長に要望活動を実施していること等を説明しました。このテーマをきっかけとして、部活動に対する子どもたちや教職員の意識の多様化に、管理職としていかに対応していくかなど、それぞれが抱えている課題を共有できました。

教育をめぐる課題は年々複雑さを増していますが、三重の子どもたちが明るい未来を築いていくことができるよう、私たち自身が希望を持ち、互いに力を合わせて取り組んでいくことを確認し、懇談会を終えました。

随 想



延長はしません 戻ってもきません

南伊勢町立南勢中学校 校長
小林 達哉

毎年立てる今年の目標は、教師になったときに立てた目標と同じ「人のために働くこと。」

本当にしたかったことは、近所の子どもたちと一緒に夏休みの宿題や日々の勉強を遊びのようにすることもわかりません。子どもが好き。学校が大事。仲間が大切。それは働き出してから今でも全く変わりません。当時は警察官、消防士、バスの運転手など色々な職業を考えましたが、今では教師であり続けることができて本当に良かったと感じています。教師人生において色々なことに一喜一憂しながら、自分を成長させていただきました。長いようで短かった37年間を、仕事の基本は「丁寧」であると信じてやってきました。そして、周到的な準備心がけてきました。微力ではありますが、尽力してきました。このまま最後まで目標が達成できるよう努力したいと思います。

管理職になって決めたことも、「人のことを最優先すること」でした。60歳までやり通すこと、そして潔く退くことを自分の美学としてやってきました。教育の世界について思うことや感じることはたくさんありますし、何か自分でもお役にたてることがあるならやってみようとは思いますが、いつまでも迷惑をかけるわけにもいきません。これからは口出しすることを控え、次世代の力に期待したいと思っています。教室で生徒と話すのが好きだった。部活動で汗をかくのが気持ちよかった。早朝の草刈りが清々しかった。思い出すときりがありませんが、充分に楽しませていただきました。なんの末練も心残りありません。一緒に働かせていただいた方々や仲良くしていただいた仲間には感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。



「皆さんは、大変な時代に校長になられましたね。これからの校長は大変です。」

熊野市立金山小学校 校長
山上 克俊

6年前、平成30年の新任校長研修の場で一人の講師が私たちにこう呼びかけた。これからの校長は、今までとは比較にならないほど、さまざまな面で大変な時代を迎えるのだと。折しも、一方的な理由で、平成29年度から校長の給与は2.8%を削減されるなど、納得のいかない扱いを受けた時期でもあった。

この6年間、新学習指導要領の改訂、学力向上への取組、いじめ・不登校の増加、教職員の働き方改革、服務規律など、対応すべき課題が山積していた。そんな中、さらに学校現場を混乱させたのが、令和2年の初めから流行した新型コロナウイルスである。

緊急事態宣言も発せられ、校長会もZOOMという今まで聞いたことのない手段を使って開かれるようになった。GIGAスクール構想の下、タブレット一人一台時代が一気に進み、現場は、これまで経験したことのない対応を余儀なくされ、正に「予測困難な時代を生き抜く」ことに直面した形となった。

令和5年5月に新型コロナウイルスは5類に分類されることになり、各所でようやく以前のような活動も、行事の精選とともに行われるようになったが、まだまだ新たな課題が山積している。教員不足、大量退職、世代間ギャップ、人材育成の難しさ、管理職を担う世代層の少なさなどである。

これからの管理職は、私が初任校長の時よりも、ますます予測困難なことも起こり、大変な想いもあるだろう。それでも、私たち退職者は、校長会という仲間とともに志を持って山積する課題に取り組む皆さんに、退職後もエールを送り続けたい。

亀山市中学校長会

「きめ細やかな支援のための
進路(進学)相談会」に関わって

夏休み中の8月5日、「フリースペースかめっこ」を運営する特定非営利「亀っ子サポート」の主催で、不登校傾向等で進学について不安のある中学生とその保護者を対象とする「きめ細やかな支援のための進路(進学)相談会」が開催されました。令和4年度に初めて開催されたこの会については、当初から亀山市中学校長会としても共催という立場で、企画・運営に携わっています。

当日は、中学生と保護者ら約80人の参加があり、県内の公立、私立高校計12校から、高校教育の取組や学校生活の様子などの説明および個別相談がありました。いずれの高校も入学後にきめ細やかな支援を行っていただいていることがわかりました。

不登校傾向等によって、高校に関する情報が少なく、通えるのか不安を持っている生徒、保護者がいらっしゃいます。近年、本市内の中学校では不登校生徒が増加の傾向にあり、各校とも校内支援体制の充実を図るなどし、だれでも気軽に各種相談ができるように努めています。進路に関しても、今回の相談会のみならず、まず学校を通じて、適宜、必要な情報等を提供できるようにさらに努めていきます。

今回のこのような取組が、誰一人取り残すことのない、きめ細やかな支援の実現に結びつき、それぞれの子どもたちの未来への学びの一步を踏み出すきっかけになればと願っています。



伊賀市小学校長会

子どもの輝く未来づくりのために

伊賀市小学校長会は、伊賀市内の小学校18校で組織されています。児童数は約3,800人ですが、学校規模は、全校児童数が500人を超える学校から全校児童数が100人に満たない学校まで様々です。

伊賀市の校長会は、市教育委員会が主催する校(園)長会議の他に、年9回集う定例校長会を開催し、積極的に情報共有、活動の検証を行っています。校長会のメンバーは3つの研究委員会(学校組織運営・教育課程・教育課題)のいずれかに属し、今日的教育課題の把握に努め、組織内で協議や研修を行っています。通常、定例校長会の前には中学校部会が、後には小学校部会が開催され、互いに各部組織力の向上を図り、活動の活性化に努めています。

また、会議だけでなく伊賀市のZサーバー内には、伊賀市校長会フォルダが作成され、学校運営に関する各校の動向が分かるよう行事などに関して一覧表を作成、各校が最新の情報に更新することで、活動の「見える化」にも努めています。行事に関しては、先行して実施した学校から情報提供され、学校間で共有することで学校運営に活かされます。これらのデータは、校長会として教育委員会との情報共有の資料としても活用されています。

小学校部会では、様々な課題に対して各校の取組を紹介したり、先輩校長から説明を加えたりする等、協議や情報交換を行っています。今後もお互いが気軽に相談でき、元気がもらえる小学校部会とすることで、伊賀市の教育の充実と発展「子どもの輝く未来づくりのために」取り組んでまいります。



編集後記

年明け早々、石川県を震源とする能登半島地震が起こり、甚大な人的・物的被害が報告されています。今夏の東陸中石川大会を振り返りつつ、被災された方々の悲しみや学校関係者のご苦労に思いを致し、一日も早い復旧を願わずにはいられません。

そのような中、『校長会みえ』第63号の発行にあたりまして、教育への並々ならぬ情熱と使命感にあふれた示唆に富む原稿をお寄せいただき、心より深く感謝申し上げます。

さて、世界では、今も激しい戦闘が続き、教育を受ける権利や生存権までもが脅かされている状況です。我が国でも、虐待や貧困、ヤングケアラー等のニュースが駆け

巡り、いじめをめぐる深刻な事案や登校支援の必要な子どもたちの増加など、課題は深刻な様相を呈しています。

厳しい現実の中、間もなく迎える春。新たなステージに立つ子どもたちに、真の幸せの形を問い続け、夢と志と勇気を与えられるよう、まず教職員が元気で笑顔でいたいものです。

校長先生方におかれましては、心身のご健康にお気をつけいただき、太陽の如く輝きながら、慈愛と活力溢れる学校経営を進めてくださいますことを心からお祈り申し上げます。